朝鮮石人像を訪ねて（57）

深田　晃二

～東大講演、佐野美術館、三ツ池公園、畠山記念館、西荻 GC、深大寺、東灘区住吉 M、染井霊園～

1．はじめに

昨年 11 月 25 日、むくげ通信 291 号の印刷が終了したあとすぐに、できたての通信 20 部を持って 18 時過ぎの新幹線で東京に向かった。東京大学大学院・韓国学研究センターで翌 26 日に石人像講義を行うためである。石人像について講演をさせていただくのはこれで 4 回目になる。

初めての講演は 2015 年 1 月 11 日に大阪市東淀川区淡路にあるアジアセンター２１のアジア図書館で行った。石人像についてまとめたパワーポイントの作成はこれが初めてで、以降に行う講演のベースとなっている。当日、大型テレビ画像とパソコンの接続がうまくいかずノートパソコン画面で十数人の客と同じ画面をのぞき込むようにして行った。神戸新聞に予告が出たのを見て、以前お世話になった伴走協会の会長も来てくれた。久しぶりでもあり伴走とは場違いのところでもあり驚いた。残念ながら早世されこの時お会いしたのが最後となってしまった。

2 回目は姜健栄先生の奨めで立命館大学コリア研究センターの衣笠校舎・末川記念会館で行った（2016 年 5 月 25 日）。

3 回目は、朝鮮半島由来の文化財を考える関西国際ワークショップ（2016 年 6 月 4 日）で、韓国の国外所在文化財財団から来られた先生や朝鮮通信使が専門の仲尾宏先生などに加えていただいた。翌日のフィールドワークは大阪・鶴見緑地、京都国立博物館、京都・高麗美術館など朝鮮石人像が多くある場所も含まれていて、現場案内パンフの作成などもした。

2．東京大学韓国学研究センターで 4 回目

2－1．いきさつ

2018 年 6 月に東京大学駒場の外村大（ﾄﾉﾑﾗ ﾏｻﾙ）先生から飛田さんに来たメールを転送していただいた。「東大韓国学研究センターの後期授業で韓国の国外所在文化財財団からの助成を受けて韓国の文化財についての授業をやる。ゲストスピーカーの一人として石人像についてやって欲しい。」と言うものだ。

話す内容は、石人像とはそもそも何であるのか、なぜ日本にあるのか、調査を始めたきっかけ、調査を続けてきてわかったこと、自分の考え、調査過程でのエピソードなどで、授業は質疑応答も含め 105 分、形にとらわれず自由に話して良いと言うことであった。このような光栄な話はそうあるものではなく、即答で快諾した。

「ご連絡頂きありがとうございます。石人像のレポートにご関心を示して頂きありがとうございます。在日石人像の先行研究があまりなくて、今は糸の切れた凧状態に陥っています。なんとかフィールドワークで持ちこたえていますが、今回の機会を捕らえて、若い人達に新しく興味を持っていただき、各国に散らばる文化財の問題について研究を促進していただきたいと思っています。良い機会を与えていただきありがとうございます。是非ご要望にお応えしたいと考えています。国外所在文化財財団さんとは 3 年来の付き合いで、明日も財団に後援して貰っている“関西にある朝鮮半島由来の文化財を知る、学ぶ”奈良会合に参加します。2 年前には私も石人像でお話をさせていただいたご縁です。」

2－2．講演内容

事前に下記の三つの資料を送付しておいた。

（1）日本各地の朝鮮石人像について

「日本の各地には、いろんな経緯で朝鮮半島から来た石人像、望柱石などの石造物が数多くある。これら朝鮮石造物は本来、士大夫や一般庶民の墓守として建てられたものだが、殆どのものに文字が記されて無く、故郷を一度離れると由来が解らなくなる。日本における朝鮮石人像の所在をとりまとめた書物は皆無に等しく、文献・ネット・口コミなどの情報を元に、文人像・武人像・童子像・石羊などを訪ねてその所在を確認している。博物館などの固定した場所に設置されたものや古美術商の売買品など、今までに訪ねた（情報だけも含む）石人像約 400 体（日本各地）を画像中心に紹介する。＜目次＞1．石人像を訪ねだした訳、2．朝鮮王陵の所在地、3．王陵配置図、4．朝鮮朝陵墓象設（石物彫刻）研究史、5．石人像の分類、6．石人像の所在地（1）韓国内の石人像所在地、（2）日本国内の石人像所在地、7．終わりに」

（2）日本所在地リスト（2018/11/26 版）

（3）朝鮮石造物の分類試案

11 月 26 日（月）午後 1 時から授業。受講者は学部生・院生併せて 15 名。加えて、外村大先生、考古学の早乙女雅博先生、何かにつけてお世話になった長澤裕子先生、昼食を共にした木宮正史先生の 4 人にも聴講していただいた。早乙女先生は東京国立博物館にも勤務されたことがあり、石人像の展示の仕方の難しさなどについて昼食時にお聞きした。

後日、外村先生から感想メールを戴いた。

「興味深い授業をしていただきありがとうございました。このように、地道に（おそらく専門の研究者はやらないようなことを）、深田さんのような一般の市民が調査しておられることは、大変重要かつ貴重な試みであると思います。今後もぜひ、調査を続け、また、いずれ、本や調査報告書としてまとめていただければ、後進の者にとっても有益かと思います。」

嬉しい激励の言葉をいただき、今年は是非、石人像の本を書きたいと改めて思った次第である。

2－3．質疑応答

私の講演の模様をビデオ動画・音声・写真に記録し、後で送付していただいた。それらを元に質疑内容を採録する。

Q1：西域の人を摸した石人像の映像が出てきたが、韓国には西域の石人像は結構各地にあるものなのか、また新羅時代だけなのか。

A1：韓国で見かけたのは、新羅時代の卦陵の１カ所のみです。

Q2：誰の墓なのか顔だけでは分からないのに、宦官像が頭を割られている映像が多くあった。どうしてそれが宦官と分かるのか。

A2：墓は後裔（子孫）が守っているので誰の墓かは分かっている。そのうち研究の成果でこの姿の像は宦官だとはっきりしてきたため、不名誉に思いたたき割ったのだと思われる。

Q3：韓国では普通のお宅にも石人像を置くのか。

A3：（質問の意味を普通の家の「墓」と勘違いして）普通の家（の墓）では望柱石のみが多い。偉い士大夫（の墓）には石人像を設置した。それらを集めて日本に持ってきたと思われる。

（先生から助言）個人の「庭」に石人像を置くことはないですね。・・・はい、その通りです。

Q4：日本にある石人像は誰かが所有している物なのか。そこに有るのは分かっているが誰の物か分からないような物もあるのか。

A4：博物館やお寺等で見かけるものは、それぞれの所有となっている。個人の家でも個人所有物で、自分の敷地内の庭に設置している。

以上、突然の質問にはもう少し慎重に質問内容を確認し、広い範囲に亘り十分な説明がいると反省している。

3．佐野美術館の神道碑ついて

佐野美術館（N35.11562,E138.91547）

講演当日話題に上った「佐野美術館の楽善君神道碑について」[1]を、後日、長澤先生から送っていただいた。川西裕也先生（新潟大学）が発表した、静岡県三島市にある佐野美術館庭園の神道碑と石造物についての研究論文である。

神道碑は、死者の生前の功徳を賞賛するため、その墓道に建てる碑のことで、朝鮮王朝では亀の形に刻んだ台石の亀趺を許されたのは二品以上の高い官位のものに限られているそうである。

統一日報の記事[2]を要約すると、この神道碑は兵庫県在住の郭昌坤氏が 2009 年に発見したものだ。郭氏は学生時代（1966 年）に過ごした三島市で、15 年前（2009 年の新聞記事の）に偶然にこの碑を目にした。その時には朝鮮の石碑らしいということはわかったが、朝鮮国王子の神道碑であることなど夢にも思わなかったそうである。2009 年に再度石碑を確認したが、全文漢字で判読が困難なため写真を撮って詳細に検討した結果、①朝鮮国王子楽善君の神道碑であること、②神道碑を撰した（ママ）のは五衛府都総管の朴弼成であることなどがわかったという。全文解読できれば楽善君の死の背景などが解明される可能性があり、専門家に検証を依頼したという。

川西論文はこの要望にこたえるもので、全文の解読をしている。「はじめに」の一部を紹介する。

「佐野美術館庭園には朝鮮王朝第 16 代国王・仁祖の王子である楽善君（1641～1695 年）の神道碑、及び石塔・長明燈・文人石・武人石・望柱石など多数の朝鮮製石造物が置かれている。神道碑とは、墓域の入り口に置かれ、埋葬者の生前の事蹟を記した碑をいう。また、長明燈・文人石・武人石・望柱石は、いずれも墓域を装飾するために設けられた石造物であり、石塔は寺院内に立てられ、その内部に仏舎利や経典などが安置されたものである。この楽善君神道碑と朝鮮製石造物については、2009 年発行の『統一日報』（統一日報社）の記事[3]によって初めて報道されたが、学会では未だその存在をほとんど認知していないのが現状である。

しかしながら、楽善君神道碑は朝鮮後期の宗親（王族）の詳細な行状を窺い得る重要な史料であり、また、石塔や文人石などの石造物は、貴重な美術史資料として従来その価値が注目されてきた。（中略）楽

善君神道碑の形状と碑文内容を概観してその史料的価値を指摘し、また加えて、石塔・文人石などの朝鮮石造物について簡単に紹介することにしたい。」

前ページの神道碑の写真は 2013 年 2 月に筆者が訪問した時に写した写真であるが、神道碑の大きさを推定願いたい。むくげ通信 257 号・訪ねて 25 で報告をしている。

川西論文では碑文内容の詳細が解説してある。それによると、楽善君は立派な体格をした情に篤い王位継承序列 2 番目の人である。金銭には淡泊で、施すことを喜び、身内である下僕には厳しかった。また、賢愚を問わず諡号（ｼｺﾞｳ：おくりな）を受けるのは不当として、死後の諡を請うことをしなかった。5 年経って時の第 19 代王・粛宗が楽善君に諡号が無い事を問題視して賜ったと言う、今の政治家に見習わせたいような高潔な人柄だったことがうかがえて興味深い。

この神道碑は植民地時代に日本人によって搬出されたと伝聞されている。また創始者・佐野氏の鶴巻温泉（神奈川県秦野市）の自宅に置いてあったものを 1979 年に当地に移したと伝えられている。

論文にある石塔 3 基・文人石 2 基・武人石 2 基・望柱石 5 基という数は私のカウントと合致しているが、長明燈は 3 基とある。私は 4 基としているが、当時の写真を見返すと 3 基しかないので訂正する。日本形式の灯籠が数に紛れたと思われる。

また 3m 近い巨躯の文人石は韓国の国立中央博物館の写真による鑑定で「ほぼ 15 世紀頃」の作と判断されている。この文人石の入手経路について、佐野氏に美術品を納入していた業者の話として「佐野氏は高島屋美術部から購入したとのこと、高島屋は多摩川の土手に放置してあったのを運んできたのだそうです。こんな大きな石像は引き取り手がなかったのだとも。日本に運ばれた文官石のうち最も大きいものでしょう。当時日本から朝鮮に運搬した積み荷を降ろしたあと、日本に帰る輸送船に石像を積んできた。」と述べたと言うことを考え合わせると、2 基の文人石は楽善君の墓とは別の場所から美術館に搬入されたとみてよいと書いている。

大阪鶴見緑地の石人像は、芦屋朝鮮寺にあったものがどういう事情か分からないが毛馬公園（旧淀川の河原）の片隅に放置されていた。それが関係者の努力により移設されたと書いた（通信 244 号・訪ねて 13）。河原や土手に放置されていた状況がよく似ている。また納入業者の輸送船の話は、日本から朝鮮に物資を運んだ後の帰りの空船のバラストとして石人像が持ち込まれたのではないかとの筆者の推測（通信 241 号・訪ねて 10）の一つの裏付けになるものである。

京畿道漣川（ヨンチョン・연천）郡チョンサン（청산）面クンピョン（궁평）里（方向的には九里市の真北約 50km）にある楽善君李潚墓の写真に見

楽善君李潚墓（上：遠景、下：部分拡大）
（Naver doopedia より）

える石造物は、墳丘から順に、墓碑・魂遊石・香炉石・両側に内侍像・台状の石・望柱石・文人石である。植民地時代にこの墓域から、神道碑とともに長明燈が日本に搬出されたと現地では伝わっていること、及び、長明燈が無いことから、佐野美術館の長明燈 3 基（写真下）のうちの 1 基は神道碑とと

もに楽善君の墓域から来た可能性が高いと書いている。

武人石も無いので、これらも楽善君の墓域に由来する可能性を想定しているが、元来武人石を欠く墓域も多いので、裏付けは難しいと結論づけられている。

「はじめに」には「石塔や文人石などの石造物は、貴重な美術史資料として従来その価値が注目されてきた。」とあり、本文の末尾は、朝鮮時代の文人石については、美術史とくに服飾史からの研究が盛んであること、石塔・長明燈・武人石・望柱石について、製作年代や特徴については、美術史の専門家による本格的な研究を待ちたいと結ばれている。美術品・美術史としてこの文化財を見る視点は、示唆に富んでいる。

4．横浜市　神奈川県立三ツ池公園

（N35.52262,E139.66230）

昨年 6 月に奈良で開かれた「関西にある朝鮮半島由来の文化財を知る、学ぶ」会合で関東在住の

方から横浜の三ツ池公園で石人像を見かけたと聞いて半年後の 2018 年 12 月 18 日に訪れた。実はこの公園は、娘家族が住んでいた横浜市鶴見区獅子ヶ谷北寺尾に非常に近い公園で、娘に聞くと子供たちとよく遊びに行ったという。娘家族は転勤で神戸六甲→横浜北寺尾→六甲→北寺尾→六甲と引越が多く北寺尾は 2 回も住んでいる場所だ。

29.7 ヘクタールで上・中・下の三つの池がある広大な公園だ。この公園にコリア庭園が有ることは娘も知らなかった。

新横浜駅からバスで三ツ池公園北門まで行き、公園内のコリア庭園を目指す。まず目に入るのがヘテ像 2 基。光化門と同じような姿で門前の両側に設置してある。その並びには木製の長柱（チャンスン）とソッテがある。なかなか良い雰囲気で迎えられたので石人像への期待が高まった。

ヘテ像の前足脇の辺りに天使の羽根のような陽刻がある。高宗の洪陵と純宗の裕陵の獣石たちに付いていたのと同じ模様である。丸い渦巻き模様から炎のようなものが出ているが、この模様の意味はまだ分かっていない。

公園の看板の一部を採録する。「神奈川県と京畿道との友好提携（1990 年 4 月）を記念し、在日韓国・朝鮮人の方々が『故郷』を感じ、また多くの県民が朝鮮半島の文化への関心と理解を深める場となるように整備した」とある。

両班（ヤンバン：地方豪族）の代表的な建物と庭園の様式を取り入れて造ってあり、庭園内及び建物内のほとんど全てに説明板が付けてあり名前と解説が添えてある。五つの庭空間にあるものの名称を列記するがどれだけご存じでしょうか。

前苑にはヘテ石・チャンスン・ソッテ。前庭には方池円島・陰陽石。主庭には別堂「通友齊」・四友壇・亀形山・六角亭「観自亭」・半月池。後庭に花階（2～3 段の花壇）・煙家（オンドルの煙突）・景石・石池・チャントッテ（장독대）。後苑には天池（卵池）・草亭・祭壇石（陰型）・井字型泉・立石（陽型）・支石（陰陽和合型）などである。別堂の中には朝鮮風のタンス・白磁瓶・茶盤・竹夫人等の解説がしてある。

案内板には竹婦人と書かれているが竹夫人が一般的な漢字表記であろう。竹夫人は唐の時代に生まれ、朝鮮半島には高麗時代に入ったといわれている。いわゆる竹で編んだ抱き枕のことで、竹のひんやりとした涼感を求め、息苦しい夏の夜は妻を押しのけて竹夫人を抱いて寝るそうだ。

さて、肝腎の石人像であるが、残念ながらコリア庭園には一体も無かった。その代わり、塀の外であるが、2 頭の獅子に捧げられた双獅子灯籠 2 基があった。この型の灯籠は珍しく、東京府中市の村越造園で 5 基、名古屋の長楽寺で 1 基、京都の西村灯呂店で 1 基見かけただけである。西村灯呂店の 1 基は韓国にオーダーして造って貰ったものだそうだ。

ここコリア庭園の 2 基とも苔が付いておらず、新しい感じがする。塀の外にあることも加味すると、このデザインはごく最近のもので新造品として追加したものかも知れない。石人像には会えなかったが、看板にあるとおり三ツ池公園のコリア庭園は、朝鮮文化に触れるには非常に雰囲気のある良いところだと感じた。

5．東京・畠山記念館

（N35.63240,E139.72708）

信長さんからいただいた情報で、通信第 269 号・訪ねて 35 で報告した東京の畠山記念館を 2018 年 12 月 8 日に訪問し石人像と対面して来た。荏原製作所の創業者である畠山一清が蒐集した茶道具・書画・陶磁など、日本・中国・朝鮮の古美術を展示公開している私立美術館である。

12 月 6、7 日と東京での仕事を終えてもう一泊して 8 日午後の在日韓人歴史資料館での土曜セミナーに参加することにした。その午前中に訪ねたわけである。

開館の趣旨には次のように書いてある。「我が国の文化は数千年の永き伝統を有し、この間各時代にわたって、世界に誇るべき独自の芸術作品が数多く醸成せられた。しかるに、近年にいたり、あるいは天災戦禍によって消滅するあり（ママ）、また世情、家運の急変に伴って散逸するもの尠からず、これを公共的に保管公開することは、蓋し刻下の緊急時と謂うべきである。（中略）深く日本趣味に傾

倒して能楽並びに茶の湯を嗜み、茶器美術工芸品の収集に努めてきたが、上記の点に鑑み多年の愛蔵品に土地建物及び基金を添えて財団法人に提出し、これが保存を図るとともに、広く一般の鑑賞研究に資し、もってわが国文化の興隆に寄与せんことを念願せらる。」

金沢能登の守護大名の血筋の家系に生まれ、事業を立ち上げた畠山一清は、成功した他の企業の

創業者にも多く見られるように、美術品を収集しながら文化的貢献を希求し、かつ実践している。石畳の道を記念館に向かう途中、右にそれた道の脇に 2 体ある。紗帽を被った文人像 2 体である。顔の特徴などから本来の 1 対のようである。

6．西荻窪・西荻ゴルフセンター

（N35.70755,E139.60265）

外村先生から情報をいただいた。「学生時代に住んでいた近くの杉並区の西荻ゴルフセンターのところにあったはず」とのこと。　早速 Google Street View で探すと見つけることができた。「新しく作ったものという印象をもった」とのことだが、写真からは朝鮮時代のもののように見える。梁冠の文人像 2 体である。

西荻ゴルフセンターの土地は、「自協学舎という学生寮の跡地」で「永井了吉という岸信介の友人でフィクサーとも関係があるらしく、どうもその関連の韓国とのつながりもありそうです。これはたまたま、帝国大学新聞の歴史を調べている方の文章で知りました。永井は、帝国大学新聞の創設にかかわったとのことです。」という情報もいただいた。ネット情報によると、永井了吉（1893－1979 年）は東京帝大工学部卒、内務省に勤務するがすぐ辞め、事業を興すも失敗。1932 年勤皇維新同盟を結成、右翼と親交を結ぶなど、昭和初期の国家主義者である。

「自協学舎という学生寮」は今も、福岡市にあるが、西荻の自協学舎と関係あるかどうかは不明である。

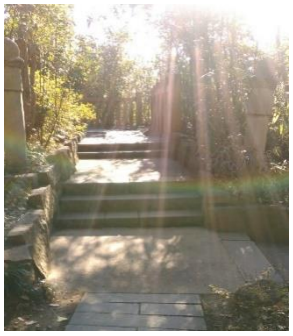
「フィクサー」の意味を再確認すると「政治・行政や企業の営利活動における意思決定の際に、正規の手続きを経ずに決定に対して影響を与える手段・人脈を持つ人物を指す」（wiki）とあり、永井了吉からは裏工作などのただならぬ雰囲気が漂ってくる。有名なフィクサーにはロッキード事件の児玉誉士夫が挙げられる。

西荻ゴルフセンターや鎌倉の建長寺などの石人像も先生から写真を送ってもらえることを楽しみにしている。

7．東京都府中市・深大寺

（N35.66795,E139.55028）

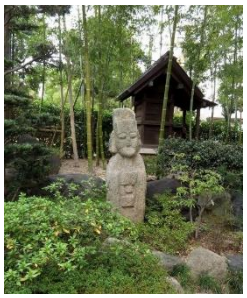
早乙女雅博先生からも情報を戴いた。「東大駒場の授業での朝鮮石造物、興味深く拝聴させていただきありがとうございました。その後、私も石造物が気にかかっていましたが、先日、東京都調布市にある深大寺の開山堂の入口あたりにある望柱石を見ましたので、添付ファイルで写真を送ります。授業で頂いたリストには深大寺が入っていなかったので、参考になればと思います。1 月 13 日に撮影しました。墓に関わる石造物を文化財としてどのように位置づけられるか難しいところですが、これからも考えていきたいと思います。」



訪問したいところが 1 カ所増えました。写真を見ると共に八角柱だが、柱を取りまく「チマ」部分の模様が違うので本来の一対ではない。機会を見て行きたいと思います。

8．神戸東灘区住吉本町 1 丁目

（N34.72237,E135.26194）



この情報は森崎和夫さんから戴いた。「今日住吉川沿いの現場があり、朝、JR 住吉駅から山手幹線道路方面に歩いてる途中、マンションの玄関

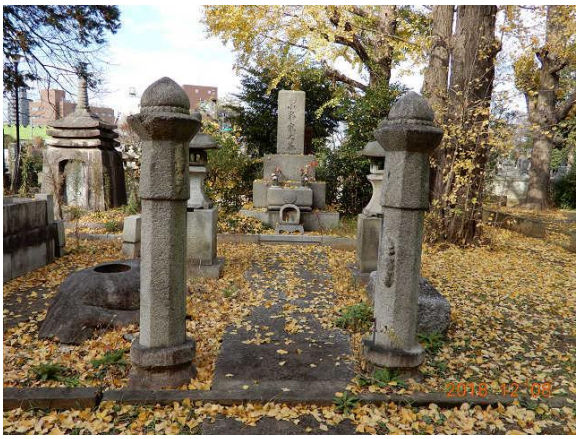
前に朝鮮石人像らしいものを見つけました。住吉本町リバーウエストというマンションです。

低い石垣の塀があって、外からだと上半身しか撮影できなかったので、塀の内側を通って、玄関前の石人像をデジカメ撮影しました。画像添付します。よく見かける石人像とはちょっと雰囲気が違う(素朴というか、荒削りというか)気がします。安寧!!」

荒削りではあるが少し頭をかしげた紗帽文人像に違いない。どこかの地方様式かも知れない。これも初耳ですので、機会を見つけて訪問し確認したい。

９．染井霊園

(N35.73711,E139.73732)



ここの望柱石については、通信 273 号・訪ねて 39 で報告済みであるが、その時は写真を載せ羅レなかった。12 月 8 日に再訪したので写真を載せる。東京都立染井霊園の 1 種イ号 20 そばの K 家の墓の前に写真のように望柱石 1 対が設けられていて、朝鮮に於ける本来の目的に近い形で設置されている。細虎（セホ：リスのような動物）が陽刻されている本来の 1 対の物であるようだ。

ただ残念なことには墓への入口門扉として使われていたようで、両方の望柱石には内向き上下に扉ヒンジ用の金具が埋め込まれている。既報でも指摘したが、このヒンジは本来の望柱石の姿を毀損していると言える。

１０．朴慶植の強制連行を聞く歴史

石人像の話題からそれるが、12 月 8 日に在日韓人歴史資料館で、第 114 回土曜セミナー「聞き書きのなかの在日朝鮮人－1960･1970 年代の朴慶植、むくげの会、古庄ゆき子らを中心にして」に参加してきた。タイトルの中に「むくげの会」とあったので興味を持ったが、我々の会とは直接関係のない関東地区の会（当時の会員は久保文、菅間きみ子、平林久枝、中島昌子、内海愛子、関口明子の 6 人）であった。講師は横浜国立大学の大門正克先生で、聴講者は会場一杯の４０名以上だった。

通信 244 号・訪ねて 13 で民団中央本部を取り上げたが、同じ場所にあるのが在日韓人歴史資料館である。1 時間のビデオから講演が始まった。

経験者からの話を聞いて文章を書く方法について、各種の例を挙げて説明がなされた。

１．朴慶植の強制連行を聞く歴史
　①朴慶植『朝鮮人強制連行の記録』（DVD）
　　１）戦後に於ける朝鮮/在日朝鮮人の聞き取り
　　２）朴慶植『朝鮮人強制連行の記録』（1965）
　　３）その後の強制連行を聞く歴史
　②1970 年代前後に於ける朝鮮体験の聞き書き
２．『身世打鈴』から広がる世界
　①内海愛子が取り組んだ聞き取り
　②新屋英子のひとり芝居「身世打鈴」
３．古在ゆき子
　①在日朝鮮人女性からの聞き書き
　②『経験を軸にして生をつなぐ生活実践』が語れれる。

①ask（問う）：本当にその人が話したいことを聞いていたのだろうか疑問が残る。

②listen（問わず語り）：相手がしゃべりたいことを話して貰う。沈黙にも意味がある。

文字資料と異なって、身体的に刻まれた時間と空間を越えた経験、日々の生活をやりくりする強さから出る、聞き書きの叙述の方法は研究されるべきであると述べられた。

ここで上映された朴慶植『朝鮮人強制連行の記録』DVD を特別に借用して 1 月 8 日にむくげの

会の学習会で上映した。飛田さん堀内さんの写った写真(上)も映像の中に出てきて盛り上がった。

(続)

［参考文献］

1) 「朝鮮学報」第 224 輯 別刷、H24 年 7 月刊）
2) 「統一日報」2009 年 5 月 20 日付記事
3) 2) 及び「統一日報」2009 年 6 月 3 日付記事